感情抑制が虚偽記憶に及ぼす影響

○安仁屋美香¹・玉城和沙¹・甲田宗良²・伊藤義徳³

(1) 琉球大学大学院人文社会科学部研究科・(2) 琉球大学大学院医学研究科・(3) 琉球大学法文学部)

キーワード: 感情抑制・虚偽記憶・DRM パラダイム

The Effect of the Emotional Suppression on the False Memory.

Mika ANIYA¹, Kazusa TAMASHIRO¹, Munenaga KODA² and Yoshinori ITO³

(1) Graduate School of Humanities and Social Sciences, Ryukyus Univ., (2) Graduate School of Medicine, Ryukyus Univ., (3) Faculty of Law and Letters, Ryukyus Univ.)

Key Words: emotional suppression, false memory, DRM paradigm

目 的

感情抑制とは、感情生起後に自分自身の感情表出を意識して抑制することを指す (Gross & Levenson, 1993)。従来の研究では、感情抑制が記憶の想起を阻害する効果に焦点が当てられてきたが (Richards & Gross, 2000)、本研究では、感情抑制と記憶の新たな関係として、虚偽記憶の生成に焦点を当てて検討を行う。

虚偽記憶とは、実際には体験していない事柄を思い出すこと、または実際に体験した事実と異なっている事柄を思い出すことを指す (Roediger & McDermott, 1995)。虚偽記憶の生成メカニズムとしては、活性モニタリング仮説

(Roediger et al., 2001) が有力である。ターゲット記憶を含む知識構造の活性化により、本来ない記憶が「あるように感じられ」、過度なセルフモニタリング等による注意資源の占有がそれを促進させるのである。この考えに従えば、感情抑制は多くの注意資源を必要とするため、虚偽記憶を生じやすくする可能性がある。例えば、不安障害などの精神疾患を呈する者は、感情抑制の使用傾向が高いことが示されており (Amstadter, 2008)、虚偽記憶を生成してしまうことが、疾患による問題を増悪させている可能性が示唆されるのである。しかし、両者の関連を示した研究は未だなされていない。そこで本研究では、ネガティブ感情の抑制が虚偽記憶に及ぼす影響を実証的に検討することを目的とする。

方 法

実験参加者 大学生 44 名 (男性 25 名, 女性 19 名, $M=21.34$ 歳, $SD=2.76$) を実験参加者として、無作為に抑制群、非抑制群、非喚起群の 3 群に割り当てた。

指標 (a) 再認課題におけるルアー語の虚偽再認率, (b) 未学習リスト語の虚偽再認率, (c) ルアー語の Remember 判断率, (d) 未学習リスト語の Remember 判断率, (e) 感情調節尺度日本語版 (ERQ: 吉津・関口・雨宮, 2013) の抑制項目 (ERQ-S), (f) Affective Control Scale の日本語版 (ACS: 金築・金築・及川, 2010), (g) 日本語版ベック抑うつ性尺度第 2 版 (BDI-II: 小嶋・古川, 2003), (h) 主観的な感情についてのリッカートスケール, (i) 課題への集中度についてのリッカートスケール, (j) 抑制・統制のチェック項目 (興儀, 2015), (k) Depression and Anxiety Mood Scale (DAMS: 福井, 1997) を用いた。

課題 修正を加えたシューティングゲーム課題 (玉城・星野・坂本・木甲斐・伊藤, 2016) 及び、再認課題を用いた。

手続き シューティングゲーム課題は 2 段階に分けて行われた。感情喚起段階において、抑制群及び非抑制群は、不可能課題であるゲームを行うことでネガティブ感情を喚起させた。続く操作段階では、抑制群のみネガティブ感情を抑制する教示を与えて同じ課題を行わせた。非喚起群も同じゲームに従事したが、達成不可能な設定にはなっていなかった。その後全ての参加者は、ゲーム中に提示されていた単語について再認テストを行った。なお、課題の前後で web 上に指

標に回答を求めた。

結 果

分析対象者 特性の考慮及び実験操作の妥当性の確保のため、以下の基準に当てはまる者を除外した。(a) 先行研究における ERQ-S の平均得点 +1SD 以上 ($M=3.87$, $SD=1.24$) の者, (b) BDI-II 得点が 17 点以上の者, (c) 課題への集中度の平均得点 -1SD 以下 (1 回目: $M=7.21$, $SD=1.83$; 2 回目: $M=7.48$, $SD=2.02$) の者, (d) 抑制群及び非抑制群では、ネガティブ感情を問う 4 項目のうち 3 項目以上で変化がなかった者, 非喚起群では、3 項目以上に変化があった者, (e) 感情抑制の程度において、抑制群では平均値 -1SD 以下 ($M=4.91$, $SD=2.59$), 非抑制群及び非喚起群では平均値 +1SD 以上 ($M=2.65$, $SD=2.30$) の者, (f) 非抑制群及び非喚起群では、自然に振る舞っていたかを問う項目において、平均値 -1SD 以下 ($M=5.39$, $SD=2.00$) の者を除外した。この結果、抑制群 6 名 (男性 3 名, 女性 3 名, $M=20.17$ 歳, $SD=1.47$), 非抑制群 7 名 (男性 3 名, 女性 4 名, $M=23.00$ 歳, $SD=5.42$), 非喚起群 5 名 (男性 4 名, 女性 1 名, $M=21.80$ 歳, $SD=1.92$) を分析対象者とした。

群の等質性の検討 性別, 年齢, ERQ-S, BDI-II 及び ACS の得点について、群の 1 要因 3 水準の分散分析を行った結果、有意な差は見られず、群間の等質性が確認された。

感情抑制が虚偽再認率の生成に及ぼす影響 感情抑制がルアー語の虚偽再認率に及ぼす影響を検討するために、ルアー語の虚偽再認率を算出し、1 要因 3 水準の分散分析を行った。その結果、有意傾向が認められ、効果量は大きかった ($F(2, 15) = 3.62$, $p < .10$, $\eta^2 = .33$)。多重比較検定を行ったところ、いずれの群間にも有意差はみられなかったが、抑制群と非抑制群 ($d = 1.34$), 非抑制群と非喚起群 ($d = -.97$) とを比較した際の効果量は大きい値であった。

感情抑制が Remember 判断率に及ぼす影響 感情抑制がルアー語の Remember 判断率に及ぼす影響を検討するために、ルアー語の Remember 判断率を算出し、1 要因 3 水準の分散分析を行った。その結果、主効果は有意ではなかった ($F(2, 15) = 0.59$, $n.s.$, $\eta^2 = .07$)。

考 察

ルアー語の虚偽再認率における、分散分析の下位検定の結果、有意差は認められなかったが、効果量は大きく、感情抑制操作が虚偽記憶の生成を促進することが示唆されたと言える。今後サンプルサイズを増やすことで、有意な結果も示される可能性がある。感情抑制が虚偽記憶の増加に及ぼす影響を明らかにした知見はこれまでになく、このことは本研究の意義を示すものである。

引用文献

Richards, J. M., & Gross, J. J. (2000). Emotion regulation and memory: The cognitive costs of keeping one's cool. *Journal of personality and social psychology*, 79(3), 410.